

旅して想うこと

E・K

昨夏、初めて憧れのヨーロッパ（今回は英仏二か国）

を訪れる機会に恵まれました。海外を旅して、あるいは滞在して感じた、価値観や慣習の違いなど、様々な印象を述べたものは数限りなくあると思います。とはいえ、実際に自分で旅をし、人々と出会い、自分の目で見てくると、やはり、是非ともお話ししたいことがでてきます。

八月のイギリスは、文字通り世界中からロンドン見物に訪れた観光客であふれていました。最初はそれとは気がかなかったのですが、よくよく見てみると、皆、手に観光ガイドを持って歩いているのです。誰もが、一度でいいから英国を訪れたいと思う気持ちだが、いかに強いか

と思知らされました。

知人が車で郊外を案内してくれました。私は助手席で地図を広げていたのですが、道路の表示がわかりやすいのです。アルファベットのM、A、AA……と、数字との組み合わせで道路の大きさがひと目でわかるのです。例えばM1というのは、片側三車線以上の様な最も大きな道路で、M20というのは、数字のケタがふえた分少し狭い道ということになります。そして、交差点にもすべて番号がついていますので、私ですら、十五分後には立派なナビゲーターでした。交通網という公益サービスがこれほど整備されていることにも、イギリスのお国柄がうかがわれました。

パリへは、英国航空の飛行機を使って入りました。機内の座席で、ちょうど隣合わせた女性は、モーリシャスからバカンスで一人旅ということでした。三年に一度、一か月の長期休暇が取れるそうです。おじ様が、エト

ワールのバス停まで迎えに来て下さるとかで、空港から一緒にリムジンバスに乗っていくことになりました。エールフランスのバス乗り場で、彼女は親切にエトワール（凱旋門前）まで、大人三枚と言ってくれました。支払いは一人分と二人分別で、というと、カウンターのおじさんは、ぶ然として、大人三枚と言ったではないかと言うのです。仕方なく、彼女が一枚、私が二枚と言い直して購入しました。何だか融通のきかない論理に、少し不満を残したものの、バスはあの凱旋門の見える停車場へ無事に到着しました。モリシヤスのSさんと、お互いの良い旅を祈り合って別れた後、私は友人と二人、シャンゼリーゼ通り近くのホテルへと、トランクを押して歩き出しました。放射状の道の難しさを考えずに近道をしようとした私達は、ちょっと道に迷いかけてしまいました。日は暮れてくるし、人通りの少ない道で少し不安に思っていると、ちょうど通りかかった初老の紳士

が、「何かお手伝い出来ますか。」と救いの手をさしのべてくれました。こちらから道を聞く前に、不安そうな様子を見てとっての優しい言葉に、異国の地へ着いたばかりの私達は救われる思いでした。とはいっても、最初は変な人ではないかと疑ってしまったのですが、その後も地下鉄の駅で、やはり初老の紳士が声をかけてくれました。私達のパリは、優しい老紳士の街ということになりました。

パリを発つ日、空港であのSさんと再会するというドラマのようなできごとで、今回の私達の旅は終わりました。

小さいお子さん達の中でも、英語を習っているんだ、という声をよく耳にするようになりました。日本人、外国人を問わず、困っている人を見かけたら、気軽に手をさしのべられるような、そんな人に育って欲しいと思うこの頃です。